

## 相武陸士第60期生懇親会

相武60期生会世話人代表 小林 實

6月23日、横浜中華街の萬珍楼本店において、懇親会を開催した。

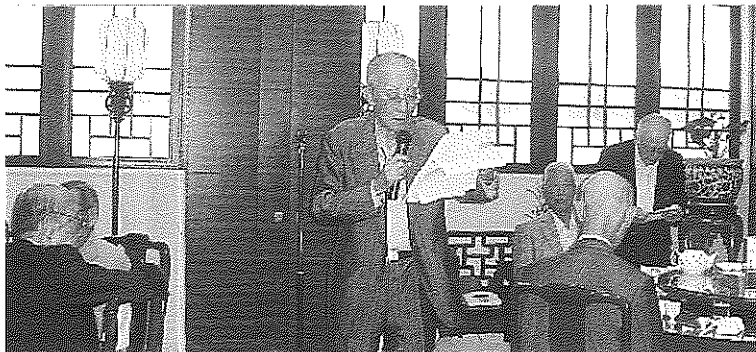
年々参加人員が減少するのはやむをえないことではあるが、本部、近隣同期生8名を加え、参加人員27名。

前回12月の懇親会以降に亡くなられた同期生11名その他戦没者に黙祷を捧げた



後、恒例どおりの業務、会計報告事項を終わり、懇親会になる。バックミュージックの軍歌に合わせて歌う人、近況について話をする人など、司会者の浦田のリードよろしく、楽しい会になった。予定時間の2時間半も近くなり、小林の指揮で軍歌演習、小山の閉会挨拶、牛島の締めで盛会裏に終了した。

参加者全員、間もなく90歳の「卒寿」を迎えることになるので、そのお祝いを



司会 浦田 徹

するとともに、次の節目の「百寿」まで元気に過ごし99歳の白寿では盛大に同期生会を開催することを約して散会した。卒寿祝いのお土産ものは、萬珍楼の月餅5ヶ入りです。会場の会話では、よくぞ90歳まで生きたものだ、との感慨にふける様子が増えました。

全国各地の同期生会の集まりは、予想



閉会挨拶 小山 満之助

を越える体調不良、臥床、他界、認知症の進行等、によって逐次閉会、停止の憂目を迎えている中で、当相武60期は、まだまだ頑張りたいという意気込みが熾んである。



久方の悲・歎・親・笑の賑わい

昭和20年、既にグラマンが本土上空を我物顔に飛び、操縦訓練もままならなかった。

航士も訓練の場を満洲に移し、航空操縦に合格した私は渡満の船上でせめて20歳迄生きたいなどと考えていたが、なんと今年は90歳、顧みて多くの方々のお蔭を思う。

幸運の第一は渡満の船中で起きた。舞鶴を出て数日、漸く朝鮮の山々が望見された途端爆撃機が超低空で来襲、轟音と共に床に叩きつけられた。嘘の様な静寂、流入する海水音、うまく立てない。船体がへの字に曲って破壊孔の大部分が水面上に出て轟沈を免がれたのだ。間もなく朝鮮の漁船に救出された私どもは無事城津に上陸し、北進を続けたのである。空船のための幸運への字であった。

昭和22年、私は有馬温泉でトラックの運転手をしてた。台湾からの一家の引揚げを待っていた。休日に神戸での映画鑑賞が何よりの楽しみ、その日も神戸三田線の最前席にいた。鈴蘭台を発車して電車はひたすら降る。異常なスピードが出ている。電柱が後方に飛ぶ。乗客が左右に叩きつけられて悲鳴があがる。運転手が私を見た。「ブレーキ」。後方の車掌に伝えてくれと言っつのだ。手を上げた私は満員の混みをかきわけて後方に進んだ。この動作が命を救った。車の中程に進んだ頃、左右に叩きつけられて進めな

くなった。轟音と共に脱線、乗客は一同となつて前部に叩きつけられた。死傷者130余名。終戦間もない頃、余り知られていないが私は丁度饅頭のアンコの部分にいて傷一つ負わなかったが、流石に翌日は体中が痛くて動けなかったものである。

昭和25年、台湾から引揚げて来た家族と漸く合流し、東京で久々の家族生活を始めたが、肺浸潤が発見され、気胸療法を受けるため毎週東大病院に通った。やがて左肺から右肺に転移し、主治医から30歳迄との宣告を受けた。せめて20歳と覚悟したこともありさほど驚かなかつたが、家族は心配して必死に看病してくれた。或日のこと、主治医がニコニコしてよい薬が手に入ったと注射して呉れた。これがストレプトマイシン。まさに起死回生であった。人生何が起きるか判らない。予科30中隊、所謂保護中隊で多くの先輩同期の悲運を見て来た私は、改めてその幸運を思う。

50は人生の半ばにして、70で距を踰えず、80にして風月を楽しみ、百歳にして天寿の花を見ると言う。百歳は望むべくもないが同門の方々と共に、風月を楽しみたいものである。

## 幸運の「ハ」の字

③0 航戦 木下短武